Shobara child musical

子どもの「笑顔」育み10年

庄原こどもミュージカル

庄原こどもミュージカルが10月18日、市民会館で舞台「ふしぎの国のアリス」を上演した。

庄原市をはじめ三次市や神石高原町から応募した84人が出演。5月から練習に励んできた成果を、精一杯披露した。小さな子どもたちが体全体を使っての踊り、元気いっぱいの笑顔。約1100人の来場者に感動を与え、温かい拍手が送られた。

この公演も今年で10年目。子どもたちの「笑顔」を育んできた歩みを振り返る。

個性を伸ばす指導法

「子どものいい顔が見たい。本物に触れさせてやりたい」。そんな願いから、平成12年3月に庄原こどもミュージカルが生まれた。当時、庄原市では子どもが犠牲となる悲惨な事件が相次ぎ、「子どもたちに笑顔と元気を」という声が出てきた。行政主導で始まるイベントが多い中で、市民17人がゼロから実行委員会を立ち上げた。

ミュージカルの演出・指導は、大阪でミュージカル広場を運営する増田明さんに依頼。毎週大阪からスタッフ6人が庄原市を訪れ、指導をサポートする。練習では、「ボディートーク」という手法で心と体をほぐし、子どもたちが自ら踊ったり、歌ったり、演技することを引き出す。子どもたちの個性を大切にし、その子にあった役、そしてセリフが与えられ、一人一人が主人公になれるよう仕掛ける。

第1回の公演「ピーターパン」では、前日のリハーサルが散々な内容。「これで本番は大丈夫なのか」と実行委員に不安が広がる中、増田さんは「奇跡が起きます」と一言。その言葉通り、本番は元気いっぱい舞台を飛び跳ね、最高の感動を与えた。「10年やってきて、これが忘れられないエピソード。増田先生の子どもを信じる姿勢、観察力はすごい」と児玉節実行委員長は驚く。

子どもたちの満足感や達成感も高く、アンケートでは全員が「ミュージカルに参加してよかった」と答える。また、観客のアンケートでは「型にはまったきれいな舞台よりも感動がある。子どもたちから元気をもらった」と感謝の気持ちがつづられている。

カープが支援 球場が舞台

順調なスタートを切った庄原こどもミュージカルだったが、公演を重ねるとともに参加者が減り、運営費の捻出にも苦しい状況になった。年間の運営費約500万円は、参加者負担金、チケット代、企業協賛金などに支えられている。大阪では6～7万円の参加者負担金も、「庄原市ではそんなに取れない。多くの子どもたちを元気にしたい」という思いから2万円に設定している。そのため、チケット代や企業協賛金がかなりのウエートを占める。

赤字が続き、児玉委員長が「もうやめようか」と切り出したとき、「子どもたちのためにミュージカルは必要なんです。なんとかして続けていきましょう」と実行委員が涙を流した。「よし、もう1年がんばってみよう」と、各家庭の日用品をフリーマーケットで売って資金を稼いだ。

そんな時、こどもミュージカルの活動を知った広島東洋カープの松田元オーナーは「子どもを思う気持ちがすばらしい。カープも活動を応援したい」と支援を持ちかけた。「市民球場に踊りに来なさい。試合前と5回終了後に踊ったら、PR効果は大きいのでは」。松田オーナーの一言で、市民球場での披露がトントン拍子に決まった。市民球場でのパフォーマンスに、子どもたちの喜びも爆発。もう一つの桧舞台ができたことで、ミュージカルの参加者も回復した。また、10月の公演には、カープの選手が応援にかけつけるなど相互交流を続けている。

「苦しい時に元気をもらった。球場で踊るというのは、子どもたちにとって誇り。今年はカープから親子合わせて300席を用意してもらい、夏休みのいい思い出づくりにもなった」。カープの思わぬ支援が存続のピンチを救った。

庄原市の誇りを醸成

「10年は長いようであっという間。苦労もあったけど、子どもたちのうれしそうな笑顔がすべての支え。どこでもできることではない。庄原市で続けて来たことを誇りに思う」と片岡佐和子副実行委員長。経験のある子どもが年下の子どもを指導する姿に、10年間の歩みを感じる。

企画や準備、資金集め、運営をすべてこなす実行委員。「子どもたちのいい顔がみたい」という熱い思いを持ち続けた。「庄原こどもミュージカルは、ミュージカルスターを育てるのが目標ではない。子どもたちが庄原市に生まれ育ったことを誇りに感じてくれたらいい。こどもミュージカルの経験を一生の心の支えとして、社会に出て活躍してほしい。そして、また庄原市に帰ってくれれば」と実行委員は口をそろえる。

ここ2～3年、独立行政法人などの助成金で運営資金を確保し、各地域でミニ公演を開くなど、ミュージカルの楽しさを広めている。しかし、国による独立行政法人の抜本的な見直し経済不況で今後の資金繰りは不安が増す。今後について、「1年・1年が勝負。できるだけ長く続け、子どもたちを元気にしたい」と青木ルリ子事務局長。

継続は力なり。引き続き地域の温かい支援が求められている。

Interview

実行委員長 **児玉　節**さん(川北町)

こどもミュージカルをやると、子どもはすごい可能性を持っていることが分かります。その可能性を引き出すためにも、子どもが力を発揮できる場所を大人がきちんと保障してやることが大切だと感じています。それはスポーツでも勉強でもいいのです。こどもミュージカルは、これからも「自分を表現できる温かい場所」であり続けたいと思います。

横谷さとみさん、**まなみ**さん(上原町)

一つの作品を通して、みんなの心がまとまるという経験。これが魅力です。本番が近くなればなるほど、友だちが増えたり、これまで話さなかった子と仲良くなったり、子どもが喜んでいます。

西村加代美さん、**文**さん(戸郷町)

増田先生をはじめ大阪スタッフ、そして実行委員の皆さん。ミュージカルに参加した子どもたちは、こんな温かい方々に見守られて、本当に幸福だと思います。この幸福がまだまだ続くよう私たちもがんばりたいと思います。

田盛　望さん（西城中1年）

こどもミュージカルに参加して4年目になります。良かったことは、いろんな地域の人と友だちになれること。そして、プロの指導者に教えてもらい、おもいっきり歌ったり、踊ったりできるので本当に楽しいです。